

聖書：コリント人への手紙第一 5：1～5

説教題：主の日に救われるため

日時：2022年4月10日（朝拝）

1～4章ではコリント教会で生じていた分派の問題が扱われました。今日から見る5～6章にかけては2つ目のテーマが扱われます。それは不道德の問題です。1節に「あなたがたの間には淫らな行いがある」とあります。ここで指摘されているのは「父の妻を妻にしている者がいる」ということでした。この父の妻とは誰のことでしょうか。これは一夫多妻を背景にした異母兄弟の母（義母）、あるいは自分の母の死や離婚によって父が再婚した新しい母（継母）のことかもしれません。いずれであれ、父の妻を妻とすることは旧約の律法の書で禁じられていました。レビ記 20 章 11 節：「人がもし父の妻と寝たなら、父の裸をあらわにしたのである。二人とも必ず殺されなければならない。その血の責任は彼らにある。」申命記 22 章 30 節：「だれも、父の妻を妻にして自分の父の恥をさらしてはならない。」なぜコリント教会の中に、この罪を犯していた人がいたのでしょうか。不道德で有名なコリントの町にあった教会だったため、周りの影響を受けやすかったということなのではないでしょうか。しかし1節でパウロは「それは、異邦人の間にもないほどの淫らな行いで」と語っています。コリントには女神アフロディテの神殿があり、そこには1000人ももの神殿娼婦がおり、「コリント人のようにふるまう」という言葉は淫行を行うことを意味するほど、この町は性的な放縦で有名でした。しかしそのコリントでさえも、ここまでのことはなかったとされています。なのにそれを行っている人がコリント教会の中にいた。「現に聞くところによれば」とパウロが言っているように、それは公のこと、周知のこととなっていました。

このこと自体大きな問題ですが、パウロがここで扱おうとしているのはそのことではありません。彼が問題にしているのは、2節から分かる通り、教会が然るべき処置をしていないこと、これを放置していたことでした。本来なら悲しんで、そのような行いをしている者を自分たちの中から取り除くべきでした（除名）。なのに彼らはそうせず、むしろ思い上がっているとパウロは言います。

コリント人たちの特徴の一つに「思い上がり」があったことは、これまでの章にも示されていました。前章6節で、コリント人たちの分派活動と関係があったのも、この思い上がりであると言われていました。4章18～19節にも、その言葉は出ていまし

た。この思い上がり、コリント教会が淫らな行いを放置することとの間にはどんな関係があったのでしょうか。彼らはこれまで見て来た通り、自分たちの知識や知恵の言葉を誇っていました。この世の価値観に立って自分たちを誇り、今や自分たちは霊的に成熟し、周りの人たちよりレベルの高いクリスチャンまた教会だと自認していました。そのような思い上がりは罪の感覚の欠如とセットです。罪に対する鋭い感覚がないことがその人を高慢へ導いています。ですから高慢な心でいるコリント人たちは、このような罪が教会の中で行われていても、それを何とも思わない状態になっていたということです。良いことではないかもしれないが、マアマアマア・・・と。

またこれと違う見方をする人もいます。コリント人たちは高慢な心で罪を軽視していたというよりも、むしろこんな罪さえも行えろと主張して思い上がっていたという見方です。このあと6章12節や10章23節に「すべてのことが私には許されている」という言葉が出て来ます。これはコリント人たちが良く語っていた言葉のようです。彼らはキリスト者の自由を誤って捉えて、「自分たちは今や一切のことから自由である。何をしても責められない」と捉えて、放縦な生活を肯定していたと。社会的にタブー視されることであっても、我々を縛ることはできない。我々はそれを越えて、このようなことさえ行うことができる！と逆にこのことで誇っていたという見方です。このどちらであれ私たちが心に留めておくべきは、コリント人たちは思い上がっていたことです。そして異邦人の間にもないほどの淫らな行いをしている人が教会の中にいるのに、それを放置し、悲しむことなく、むしろ自己満足、自己賞賛の思いで満ちていたということです。

そんな彼らにパウロは教会として正しい対処をなすべきことについて語ります。まず3節にあるのはパウロの判断です。彼は今、エペソに滞在していますから、からだはコリントにはありません。しかし霊においてはそこにいると言います。そして「実際にそこにいる者のように、そのような行いをした者をすでにさばきました」と言います。これはこの知らせを受け取って、パウロはすでにこのことに関する審判を自分の心の内で下したということです。これは前後関係から分かりますように、その人を教会の中から取り除くこと、除名にすることです。しかしパウロはだから直ちにそのこと実行せよ！とは言っていません。続く4節に言われているのは、コリント教会が行うことです。ここは訳が少し分かりにくくなっていますが、3～4節は次のような意味であると考えられます。パウロはコリント教会についての知らせに接して、コリン

ト教会の設立者、父、キリストの使徒として、この淫らな行いをしている人をどう扱うべきか、その判断を決めました。それが3節です。そして4節ではコリント人たちも、コリント教会の集まりにおいてそのことを決めるようにと促しているということです。コリント人たちは、4節で言われていますように、主イエスの名によって集まるべきです。すなわち主に結ばれ、主のみからだである教会共同体として集まります。そこに「私の霊」もともにあるとパウロは言います。具体的には聖霊に導かれて記した使徒的権威を持つこのパウロの手紙が、そこで朗読されることを通して、パウロもそこに言わば臨席するということでしょう。その集まりは「主イエスの名による」集まりであるだけでなく、「主イエスの御力とともに」ある集まりであるとも言われています。つまりその集まりで決定されること、戒規には主の力、主の権威が伴うということです。そしてパウロが述べていることは「サタンに引き渡す」べきであるということです。これは明らかにこれからなされることです。ここに教会の戒規は、たとえば使徒と言えども個人によってなされるべきものではないこと、それは教会共同体の行為としてなされるべきものであることが示されています。確かにここではパウロが使徒として、その方向性を先に示してはいます。しかしだからと言ってそれで戒規が執行されるのではなく、教会の同意と決定により、つまり教会共同体の行為として、これを行うように！という原則が示されています。

その戒規の内容としてパウロが示している「サタンに引き渡す」とは除名のことです。同じ表現が聖書にもう一回、テモテへの手紙第一1章20節に出て来ますが、そこでも同じです。なぜこういう言い方をするかと言えば、たとえばコロサイ書1章13節で「御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました」と言われていますように、主を信じて教会の一員となることは、御子のご支配の中に移されることを意味するからです。つまり除名されるとは、キリストの支配の外に置かれること、従ってサタンの領域に放り投げられることを意味するのです。ヨハネの手紙第一5章19節に「世全体は悪い者の支配下にある」と言われている領域へと引き渡されるのです。

これは教会が行う戒規の最後の手段です。教会戒規、教会訓練についてはマタイの福音書18章15～20節にイエス様が教えられたガイドラインが記されています。そこに述べられていますように、個人の罪はなるべくプライベートに訓戒すべきです。公にしなくて済む罪は公にせずに関わるのが第一原則です。しかしそうしてなされる

勧告を受け入れない場合、なお罪の道を進んでやめない場合、最後の手段として除名という処置があります。このコリントにおける近親相姦の罪はすでに公になっていました。しかも「父の妻を妻にしている」と現在形で語られていますように、それは1～2度の誤った行為ではなく、継続して続けられている状態です。そういう場合、「彼を異邦人のように扱いなさい」とイエス様は言っておられました。パウロのここでの言葉は、そのイエス様の方法に従ったものです。

さて除名の目的として二つのことが言われています。一つは「その肉が滅ぼされるように」、もう一つは「それによって彼の霊が主の日に救われるため」です。これらはそれぞれ近い目的と遠い目的と言えます。まず一つ目の「その肉が滅ぼされるように」とはどういう意味でしょうか。教会から追い出されることによってサタンに引き渡され、メチャクチャにされるという意味でしょうか。特に肉体的苦痛を受け、死に至るということでしょうか。確かに罪を犯した人にそういうさばきが臨む場合があります。使徒の働き 5 章に出て来るアナニアとサツピラがそうです。聖霊を欺いた罪のため、直ちに死ぬというさばきを受けました。あるいはこの手紙の 11 章 30 節には、聖餐式を軽んじて飲み食いした結果、コリント教会には弱い者と病人が多く、死んだ者もかなりいると言われています。恐ろしい話です。しかしこれらはいずれも教会から除名され、その結果、サタンに引き渡されてそうなったという話ではありません。除名という教会戒規と、肉体的苦痛及び死が結び付いているという暗示は他にありません。またもし 5 節の「肉」を肉体の意味と取り、この節後半の主の日に救われる霊を、肉体と対の関係にある「霊」のことだと取ると、キリスト教の救いは霊と肉体の両方であるという聖書全体の主張と合致しないことにもなります。

結論的に良いと思われるのは、5 節の「肉」は、3 章 3 節で見た「肉」と同じ意味に取ることです。3 章 3 節でコリント人は「あなたがたはまだ肉の人」と言われましたが、その「肉」とは生まれながらの、神に逆らう、この世的な人間の性質のことでした。そういう天国とは相容れない性質が滅ぼされるということです。ガラテヤ人への手紙 5 章 24 節：「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。」それが滅ぼされること、死に至らしめられることです。どうしてそのようなことが起こり得るのでしょうか。その人は教会から追放されてサタンのもとに置かれるようになり、色々とショックを受けることが考えられます。その人はいわばもう一度あっちの世界、主の守りが取り去られた側の世界を味わいます。そこ

で霊的に目を覚まさせられるのです。これではいけない。このままこちらにいたのでは大変なことになると。そして様々な苦しい経験を経てでしょう。これまでの生き方を悔い、もう一度、主のもとに悔い改めと信仰を持って戻って来る。こうした道を通して最後に「彼の霊が主の日に救われる」ということが起き得るということです。「主の日」とは主の再臨の日のことです。もちろんいつでもこのようにうまく事が進むわけではありません。教会の外に追い出されて一層悪の世界へ落ちて行く場合もあるでしょう。しかしここに除名さえも、その人の救いを祈り願ってなされるものであることが示されています。除名とは単なる追放とか、汚れたものの切り捨てではないのです。それはその人のやがての回復のため、癒やしのため、その人の救いを願ってなすものです。サタンの領域に放り出されることは大変な危険を意味しますが、神はサタンさえもご自身の目的のために用いることができることを仰ぎ、そこでの奇跡的な大手術を祈り願って、主が言われた方法に従うように！とされているのです。

私たちは今日の箇所から教会は聖さをいい加減に考えてはならないと教えられます。個人としてもそのことを考えて生活すべきですが、教会としてもそのことを考えて生活しなければならないと。もちろんこのことは、私たちが罪のない完璧な生活を送る人でなければならないということではありません。私たちは正しい感覚を持っているなら、日々罪を犯す自分に悩み、日々主のもとに逃れて行くべきです。そしてそこで悔い改めを通して主の赦しと聖めを受けて新しい歩みへと導かれて行くべきです。主は罪人の救い主、私たちの唯一の望みです。そして私たちは個人がそう歩むばかりでなく、主にあって一つのからだとして結ばれている他の兄弟姉妹のことも心にかけるのです。もしそこに罪を犯しても悔い改めず、公然とその状態を続ける人がいる場合、教会は忍耐深い勧告を経て後、戒規を行わなければなりません。その最後の手段として、その人を除き去ること、すなわち「除名」という方法が定められているのです。その人の霊が主の日に救われることを祈り願いつつ。私たちはこの主の方法、聖書の方法に従いたいと思います。そしてその人の益に仕えるとともに、教会は聖さへと召されていることを益々自覚して、一層私たちにその歩みを導いてくださる主により頼む歩みを続ける者たちでありたいと思います。主との生きた結びつきの中で、主によって聖められる歩みへと進み、その生活を通して主を映し出し、主を証しする、主の教会の栄えある歩みへと導かれ、整えられて行きたいと思います。